2020年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

外来化学療法を受ける再発がん患者に対する訪問看護師と病院看護師の連携の実践と在宅療養や訪問看護への影響

学位の種類：修士（看護学）

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科　博士前期課程　人間健康科学専攻　看護科学域

学修番号：19894704

氏　名　：塩山　里英

（指導教員：島田　恵）

注：1ページあたり1000字程度（英語の場合300ワード程度）で、本様式1～2ページ（A4版）程度とする。

目的：外来化学療法中の再発がん患者に対する訪問看護師と病院看護師の連携の実践と、その連携が在宅療養や訪問看護に与える影響を明らかにすることを目的とした。

方法：A市B・C区内の訪問看護ステーションに勤務しており、外来化学療法中の再発がん患者への訪問看護の過程において、通院先の病院看護師と連携をとり在宅療養や訪問看護に良い影響があった事例の経験がある訪問看護師5名を対象に、半構造的面接を行い、質的記述的に分析をした。

結果：外来化学療法を受ける再発がん患者に対する訪問看護師と病院看護師の連携の実践と在宅療養や訪問看護への影響について、訪問看護師は外来化学療法を受ける再発がん患者に関わるにあたり、【先を予測して地域で関わりながらいざという時に備えたい】という思いを前提として持っていた。そのうえで、訪問看護師は【日常の姿を見ているから支援したいと思う】【どんどん変わる状況に対応しながらも危うさを感じる】【ケアが繋がるよう自分が伝えるしかない】【訪問看護指示書は訪問看護開始のためのもの】を動機として連携を取り始めていた。さらに、【先が短い中でお互いが知り得ない情報のやり取りを始める】【患者の負担なく本音が伝わるよう代弁を繰り返す】【最初に共通の見解を持ち情報をやり取りしあう】【暮らしに入って見える視点を伝える】【ケアに結び付けてくれる病院看護師と繋がる】【病院内連携の現状は見えないなりに配慮する】【その時繋がりたい相手に確実に繋がる方法を選ぶ】【相手に伝わるような方法を駆使する】【双方からタイムリーにケア継続のための段取りをする】という連携を実践としていた。これらの実践は、【その人らしい時間が持てる】【身体的に楽になり治療を継続できる】【少しずつ病院医療者の気づかいを感じる】【自分に提供されているケアに納得して安心する】というように在宅療養に影響し、【他職種と

の結束が強まる】【情報を個別性のある具体的なケアに活かす】【病院看護師と重さを分かち合える】【看護実践に確信をもって次に活かす】というように訪問看護に影響していた。

考察と結論：訪問看護師と病院看護師の双方からのタイムリーな連携によって、残された時間が短い中でも患者がその人らしい時間を過ごすことに繋がっていた。また、訪問看護師が暮らしに入って見える視点を病院看護師に伝える実践によって、患者は外来でも医療者の気づかいを感じ、それは患者の希望を支える支援に繋がっていた。双方からのタイムリーな連携ができたのは、地域からの依頼で訪問看護が早期から開始され、連携を始めた最初のやり取りで直接話すことの利点を生かし、病院看護師と確実にやり取りをしようとした実践によるものと考えられたた。また、連携によって訪問看護師は、病院看護師と重さを分かち合える心強さを感じていた。訪問看護師と病院看護師の連携を促進するために、訪問看護師は在宅での医療介護連携が、病院と連携するための環境づくりにもなるという認識をもって取り組む必要がある。また、患者の生活の様子を病院看護師に繰り返し伝える事や、病院看護師の実践が患者の希望に沿った生活に繋がったことも積極的に伝えていくことで、病院看護師も看護実践に確信を持つことにつながり、それが連携を促進する一助となると考えられる。